HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	賃労働論の根本問題について ： 筆宝康之氏の批判に答えて
Author(s)	荒又, 重雄
Citation	北海道大學　經濟學研究, 23(3), 65-95
Issue Date	1973-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31264
Type	departmental bulletin paper
File Information	23(3)_P65-95.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

賃労働論の根本問題について

―― 筆宝康之氏の批判に答えて ――

荒 又 重 雄

まえがき
Ⅰ，筆宝式「批判」の特徴
Ⅱ，筆宝氏の弁証法
Ⅲ，筆宝氏の商品価値論
Ⅳ，筆宝氏の賃労働論
むすび

まえがき

このほど筆宝康之氏は，拙著『賃労働の理論』を主たる材料としつつ，わたくしの賃労働理論を批判する論文を公表された[1)]。才気にちりばめられた文章の行間から立ちのぼる妖気にあてられぬよう心を配りつつ氏の基本論旨を読みとるのは，わたくしとして努力を要することであったが，氏の意図するところが隅谷三喜男氏の「賃労働」概念の発展にあること，氏の経済学および哲学とわたくしのそれとが，かなり異質のものであるらしいことが，わたくしとしてもわかってきた。それゆえ，とりあえず反批判の筆をとることにしたのである。

拙著『賃労働の理論』は，公刊以来すでに5年を経たが，著者のわたくし自身にとっても執筆当時からいくつかの限界を自覚せざるを得ぬものであり，未だそれを果してはいないが，後編を考慮せざるを得ぬものであった。また，試論として学界に問題提起しようとしたものであった以上，ねがわくは学界において揚棄さるべきものであった。したがって，拙著への批判はわたくしの望むところであり，反批判をなさずに済むことこそもっとも望ましいこと

であった。いま，わたくしがなしつつある反批判の作業は，実はわたくしにとって一つの不幸である。というのは，とりあえず必要とされている反批判は，わたくしの賃労働理論の発展ないし展開を試みるものであるよりは，わたくしの賃労働理論の基本命題の再説あるいは敷延であるからである。だが，それは拙著が充分の典拠を示さず，あるいは諸説への充分な評注なしに書かれたことの報いでもあろうし，筆宝氏の批判の中には隅谷理論の展開の試みもほのみえるのであるから，わたくしとしてはこの不幸を甘受すべきであろう。

とはいえ，本論に入るに先立って，筆宝氏の批判の形式について一言のべざるを得ないのである。

1) 筆宝康之「賃労働論の課題と根本問題 ―荒又重雄『賃労働の理論』の批判―」，吉武清彦編『社会政策学の現代的課題』(北海道大学図書刊行会) 所収。

I　筆宝式「批判」の特徴

わたくしは本稿において，筆宝氏の論文を学術的なものとして取扱かう。

氏は冒頭のパラグラフでのべている。単なる「書評やポレミークではなく，かつて氏（荒又……筆者）の演習で学んだこの荒又理論構想に胸を借り，その批判を通して自らの模索する賃労働論の課題とその根本問題の所在をより明確にしていくことを目指している[1)]」，と。この文章の基本論旨に別に異議があるわけではない。しかし何気なく挿入されている修飾語，「かつて氏の演習で学んだこの荒又理論構想」を眼で追ったとき，かなりの読者の脳裡には，筆宝氏の荒又説理解が，荒又との演習における長期間の討論を通じて形成されたものらしい，との推定が生れるのではあるまいか。「氏の演習」とは，事実は，拙著『賃労働の理論』が公刊された年度の大学院の講義において，わたしが拙著の基本論旨を数回にわけて述べた，ということなのである。筆宝氏の賃労働論は，本稿にわたくしが示すごとくに，隅谷三喜男氏のそれの系譜をひくものであり，筆宝氏の荒又説理解にわたくしは直接の責任を有し

ないのである。

筆宝氏は「荒又理論の学説史的位置」について「大河内『労働力概念と暉峻義等氏らの労働科学の遺産を二本柱とする[2]」ものだと指摘している。拙著『価値法則と賃労働』には，両者を批判的に継承すべくかかれた論文が収録されており，氏の指摘は外見的にも根拠のあるものである。問題はその部分に付された註である。そこには荒又理論の形成に影響を与えたとみられる諸論者が列挙されているのであるが，中に次のようにある。「この点での私見を示せば，荒又理論では先の『二本柱』の他に，何よりも『資本論』理解における河上肇と長谷部訳，史的唯物論における永田広志と見田石介……，なお以上の他，これに匹敵する背景要因として，第一に氏のロシア賃労働史研究があり，第二に氏の理論形成の出発点をなしたその学生時代の出合いにおいて，氏に『胸の高鳴り』の衝動を与え，『ここに何かがあるのではないか！』と期待せしめ」た隅谷論文の「意義は無視できない[3]」。ここに引用した筆宝氏の見解が当該個所で根拠とともに示されているのは，荒又理論と隅谷理論の関連のみである。

筆宝氏の叙述に眼をとおすとき，わたくしは次の三つの記憶をよびさまさせられた。その一は，ある日，筆宝氏は大きな紙に賃労働理論展開の系統樹を描いたものをわたくしに示し，わたくしにわたくしがそのどこに位置するかをのべよ，と質されたのである。わたくしの理論の位置はわたくしの主観によって確定しえない。わたくしは困り，結局，筆宝氏にとって明快な答えをなしえなかった記憶である。その二，ある夜，筆宝氏はわたくしに電話をかけ，拙著『賃労働の理論』のまえがきに，わたくしがかつて隅谷三喜男氏の論文「を店頭にみたとき，胸の高鳴りをおさえることができなかった」とあるのはどういう意味か，と質された。わたくしが学部学生のときの話をそれ以上明快にせよといわれても，これまたわたくしにとって困った質問であった。だが，氏がとくに根拠を示さずにカッコで括った，「ここに何かがあるのではないか！」と「期待」したというのは，あるいはその夜のわたくしのことばかも知れない。その三，ある夜，筆宝氏とわたくしは他に一人をま

じえて一献傾むける機会をもった。その夜の学問的よもやま話の中で，わたくしは河上肇，永田広志，長谷部訳『資本論』の影響をうけた，とわたくし自身の主観を語った記憶がある。しかしこれはさしあたりわたくしの主観であり，筆宝氏の見解はもっと別の根拠をもつべきであるが，その根拠は明示されていない。かくて氏の見解なるものは，わたくしにとってあまり後味がよくない。荒又理論はその発生過程を微細にわたり追跡せねばならぬほどの大理論ではないし，そんなことにかかずらわるほどの日本の研究者は閑暇をもてあましているわけではない。

とはいえ，筆宝氏のこの文章は，わたくし自身にも反省をせまるものであった。論争ははっきりとした記録にある文章を材料としてなすべきである。わたくしはかつて隅谷三喜男氏のことばを筆宝氏を介してうかがい，これを拙著『価値法則と賃労働』の中に註として書きこんだ。[4] これに対し筆宝氏は，今度の論文の註で関説されている。[5] 拙著を脱稿したときのわたくしの記憶では，隅谷氏は，「労働力の支出が何らかの具体的有用労働に身分的に職能的に固定することのなくなった」労働力一般のみが「労働力」と呼びうる，とのべられたように聞いた。しかし今度の論文では，「奴隷や農奴では『労働力』は＜彼自身＞に合体し，埋没したまま」だが，賃労働の時代にはじめて労働力が「人格から社会的に切り離されうるもの」となった点が注目されているのだ，とされるのである。わたくしの側の聞きちがいだったのか，あるいは隅谷氏側の変更なのか，あるいは筆宝氏の伝え方に問題があったのか，今や明らかにすべくもないのである。伝聞のとりあつかいには心すべきである。

筆宝氏はわたくしの犯した「二つの重大な事実誤認」の一つとして，わたくしが「人喰い」あるいは「人肉嗜好」を「人類史の一段階にまで拡張」したのは，「人類史の原始共同体的未開社会をホッブス的野蛮状態」とみるものであり，「エンゲルス的・進化論的な」人喰い理解である，と批判し，わたくしの事実誤認をたしなめるべくトインビーに英語でかたらせている。[6]「エンゲルス的」とはどういうことか充分に理解できぬが，わたくしはここでエンゲ

ルスを援用したわけでもないのでそれはさておき，批判されたわたくし自身の文章を引用しよう。

「労働力は，生産の諸々の歴史的形態のいかんにかかわず，労働対象および労働手段とならんで生産の契機であり，なかでも能動的・主導的契機である。……

労働力が生産力の能動的要素であるとはいっても，その本質が何の条件もなしに顕われるわけはない。生産力の発展の低い水準のもとにあっては支配的契機は自然そのものである労働対象である。そこではしばしば，人間自身が労働対象と見做される。他種族の人間（場合によっては同種族内のものさえ）が食物として捕獲され，あるいは害獣として抹殺される。生産力の水準がやや高まり，剰余労働の可能性が生れると，人間は労働対象ではなく労働手段と見做されるにいたる。奴隷はものを言う家畜であった。労働力が商品となつているということは，貨幣をもって購買されうるものとしては，他の諸商品と同格の位置にあることを意味し，労働手段の圧倒的発展を支配的契機としている資本制社会においては，労働力も労働手段と置換可能な同格のものと見做されていることを意味する。労働力自身をも含む生産力のより一層の発展は，労働力をその本来の位置に高め，商品という歴史的社会的形態規定と照応しないものとするであろう[7]」（アンダーラインは筆宝氏に引用された部分を示す[8]）。

さて，わたくしはここで，筆宝氏に「『人喰い』は常食ではなく＜土着宗教の儀式[9]」であるとたしなめられなくてはならぬことをのべたのであろうか。エネルギー代謝を考えれば，「人喰い」が人間社会における主要な蛋白質補給形式ではありえぬことは，理論的に明らかである。わたくしはそうした間違った観念をもったことはないつもりだし，現にそんなことをのべていない。しかしまた，「儀式」の奥に何らかの物質的関連がなかったかどうかも，つねに考慮せねばならないであろう。つぎに，筆宝氏は，「『害獣』なるものは後世の仮空の創作物である[10]」と，軽くのべている。わたくしは寡聞にしてどのような「創作物」があったのかを知らない。だが，世界史上ではついこのあい

だ，新大陸に上陸した白人たちは，土着のアメリカ・インディアンたちを害獣として駆逐し，抹殺したではないか。われわれの時代のベトナム戦争では，輸血用の血液が不足したとき，ベトナム人たちが労働対象として捕獲され，血を抜かれたではないか。

少々わずらわしくもあるが，同様の性質をもった筆宝氏のいま一つの批判点を検討しよう。筆宝氏は，わたくしの「賃労働者の生活過程」論について引用ののちのべる。「もし現実に生活が『労働力商品の再生産過程でしかありえない』ならば，＜永遠の賃労働＞になってしまい，『否認者』の意志はどこにも経済学的に表現と位置を与えられず，この悪循環を断ち切ろうとする労働運動の生起する余地もなく，資本家にとって予想外のこれほど結構なしかも薄気味悪い命題はない[11]」，と。批判された当のわたくしの文章はどのようなものであったか。

「労働力は人間存在の一属性としてのみ存するものであるから，労働力商品の再生産過程は賃労働者の生活過程である。実現した労働力商品の価格が労働力商品の価値によって規制されているかぎり，労働力商品の価格を実現した貨幣をもって必要生活手段商品を購入し，それを消費しつつ行なわれる賃労働者の生活過程は，労働力商品の再生産過程でしかありえない。労働力は再生産されているが，彼の手中にはあいかわらず生産手段が欠如しており，彼の労働力は再び商品とならざるを得ない。……

資本制的生産における賃労働の特徴は，労働力商品が労働者自身の私的所有の対象となっている点にあった。労働力の再生産は結局のところ労働力商品の再生産でしかありえぬとはいえ，しかし，それは日々労働者自身の私的所有の領域内にあるものとして再生産されるのである。労働力商品の現実的引渡し過程を終えた賃労働者は，資本の直接的支配からはなれ，彼自身が自らの主人たりうるものとなり，生活時間の残余を生きる。賃労働者の生活時間から労働日を差引いた残余は，賃労働者の狭義の生活過程であり，賃労働者が自らのものとしての労働力商品を再生産する過程である。これは個々の賃労働者にとっての私的な過程であり個々の資本家から

自由な生活である。

労働者の生活過程は，労働力の保全・発展を結果する日々の労働力再生産を中心としつつ，人間性の全面的開花にむかって進行する人類史の一断面であるが，しかし，賃労働者の生活過程は，生活時間のうち労働日部分を資本の生活過程として喰いとられた残余にすぎず，その残余さえもが，再生産された労働力が商品として実現しうるものであるように，資本家にとって使用価値ある労働力を再生産する過程たらざるを得ないのである。賃労働者は，労働力商品を再生産するために生活する。……」[12]（アンダーラインは筆宝氏に引用された部分を示す[13]）。

わたくしは上述の文章によってはたして＜永遠の賃労働＞に帰結せざるをえぬようなそんな「薄気味悪い命題」をたてたのであろうか。読者の判定にまちたい。ともあれ，筆宝氏はわたくしの論述の文脈を無視して，そこからそれ自身では理解しがたい結論的命題だけ抜き出して引用し，そしてこれを，現実の生活は「労働力商品の再生産過程でしかありえない」，という命題に簡約化してしまうのである。

筆宝氏の荒又理論批判の中心部分は，「1，展開＝叙述方法の批判」，「2，基礎命題の批判」，「3，若干の事実誤認」の指摘，の三つの部分からなるのであるが，「展開＝叙述方法の批判」において，次のようにのべられている。「何が展開方法上問題なのか。結論的に示せば，私にはそれが氏（荒又……筆者）のいわゆる『賃労働の矛盾の社会的発現という表現に含まれる論理構造に示されていると思われる。……『労働力商品の矛盾→賃労働の矛盾→その社会的発現』の上向展開では，この社会の両階級の現実的対立闘争をいったん『労働力商品』→『賃労働』概念に象徴させ，次に現実の矛盾の社会的発現をその概念の発現として説明する二重の操作の欠陥である（実在世界の運動論理と叙述の弁証法との関係）。『商品の矛盾』から恐慌→戦争までも強引に説こうとするマルクスの亜流における悪い影響を受け，氏が資本論の『冒頭商品』の位置に，発想としては卓抜ながら『労働力商品』をはめこみ，物的商品のかなり無理なアナロジーで賃労働論を展開しようと意図され

たのでなければ幸いである。人間能力にかかわり＜資本に対する自立化の要因＞を内包すべき『賃労働論』の方法論的端緒を，近代市民社会を学問的体系として把握する『資本論』の叙述の端緒をなす『対象的な物としての商品』のように設定できるのかをまず荒又氏に問いたい[14]」。

さて，これは一体どういう批判なのであろうか。「……意図されたのでなければ幸いである」，というが，その点での筆宝氏の判定はどうなのであろうか。「マルクスの亜流の悪い影響を受け」て意図したものである，とか，いやそうではない，とか，わたくしが返答しなくてはならぬことなのであろうか。わたくしは，たしかに，賃労働の諸現象の表象を概念にかえてゆく出発点に労働力商品の概念をおいた。それは，「大河内理論」との関係の中でわたくしの中にはぐくまれた考え方であった。労働力商品の概念が適切な端緒たりえたかどうかは，その後の展開の出来不出来で示されている。そのいずれにも，わたくしの二つの著書の全体が材料としてある。わたくしはそれ以上に何かいわなくてはいけないのであろうか。「……できるのかをまず荒又氏に問いたい」，と筆宝氏はいう。だが，これを判定する責任は批判者の側にある。できないことを明らかにした上で，できないことを被批判者に説得するための表現の場合も考えられる。しかし，できないことの筆宝氏による積極的解明はない。そして註に，「この点は梯明秀『資本論冒頭文節の体系的意味』……を参照[15]」せよとの指示があるのみである。(わたくしは筆宝氏の指示にしたがって梯論文に眼をとおした。この論文についていいたいことはのちにのべる)。「冒頭商品」についてのわたくしの議論が，実は，拙著『価値法則と賃労働』の中にあり，索引にも出してあるのだが，筆宝氏はこれには触れない。わたしは，問われて何か答えねばならぬのであろうか。

批判として読めばかように欠陥のあるものではあっても，質問として読めばまたおのずから別である。わたくしは依然として，筆宝氏のいわゆる「人間能力にかかわり＜資本に対する自立化の要因＞を内包すべき『賃労働論』の方法論的端緒」を労働力商品概念におくことができる，と考えている。なぜなら，労働力商品には，労働力という人間能力が内包されており，また，

労働力商品は資本と不可分であるにしても，労働力そのもの，すなわち商品性を捨象したかぎりでの労働力一般は，資本なしにも存立しうるものだからである。「冒頭商品」とのアナロジーは，このさい必要ではない。次に展開の「論理構成」についてであるが，わたくしは「現実的対立闘争」を労働力商品概念に「象徴」させたり，「現実」をその「概念の発現」として説明する「操作」をしたつもりはない。わたくしがやろうとしたことは，分析し，対象の内的必然性を言い表わすように綜合することである。「具体的なものは，それが自分を分割し非現実的なものとなすことによってのみ，みずから運動するものとなる」。「無力なる美は悟性を嫌悪する。美がなしえないことを悟性は要求するからである。しかし，死を忌避し，破壊から免れてあろうとする生ではなく，死に耐え死のなかで自分を維持する生が，精神の生である」（ヘーゲル）[16]。

1）前掲書，342頁。
2）同前，345頁。
3）同前，346頁。
4）拙著『価値法則と賃労働』，206頁。
5）筆宝論文，前掲書，373頁。
6）同前，368—369頁。
7）拙著『賃労働の理論』，15—16頁。
8）筆宝論文，前掲書，368頁。
9）同前，368頁。
10）同前，368頁。
11）同前，362頁。
12）拙著『賃労働の理論』，91—92頁。
13）筆宝論文，前掲書，361頁。
14）同前，350—351頁。
15）同前，351頁。
16）ヘーゲル『精神現象学』序論，山本信訳，中央公論社『世界の名著』第35巻，112—113頁。

Ⅱ　筆宝氏の弁証法

筆宝氏はのべる,「荒又理論批判では，一方で何が主体（主語）で何が客体で両者はどう関連づけられているか（主客の弁証法）について」の「吟味」を怠るわけにはゆかない[1]，と。その吟味は，とりわけわたくしの次の文章を材料としてなされている。

「労働力は人間存在のもっとも基本的な属性の一つである。労働力であるということは，人間存在に対して与えられる最も本質的な規定性の一つである。労働力の支出たる労働は正常な生命活動の一つである。人的存在はその他の諸属性をもち，従って人間の生命活動は労働以外の形態をもとるものであるとはいえ，労働が人間自身を創ってきたほどに労働力という規定性は人間にとって本質的である。労働生産物もまた，このような生命活動の結果であるとはいえ，あくまで結果である。労働力商品は，結果ではなく，活動そのものを他人の支配下に引き渡すことを意味し，その活動が自らのではなく他人の活動に疎外されることを意味する。結果としての生産物は，労働力の価値に見合う分についてのみ戻されるとはいえ，労働が他人のものになった点はそのことによっては回復されない。労働力商品は支配被支配の関係を内包している[2]」。（アンダーラインは筆宝氏のもの[3]）。

筆宝氏はこの文章を細かく評注されるのであるが，当面の重要点についてのみこれをみると，まず「属性」という語に疑問符がうたわれている。だが，主語に属する，したがって述語たりうる規定性を属性といってなぜいけないのか。「労働力である」という表現もアンダーラインされ,「主語は何か？……『である』の内容を示せ」と評註される。同様に,「労働が人間自身を創ってきた」という表現にも,「『労働』が主語におかれ，神秘的で不合理である。……私なら『人間（人類）は労働によって生存を維持し，労働を通して学び鍛えられ，成長してきた』とする，と評註される。「労働力商品」というわたくしの語は，そのつど,「労働力が『商品』となることは労働者にとって」,であるとか,「労働力の日々の商品化」とかと，筆宝氏によっていいかえられてい

る。いったい筆宝氏にとっては,「主語の弁証法」とは，主語と客体とを悟性的分離することのみ意味するのであろうか。主語は外面的に把握されるのみで，内的生命は不可知のままとどまるのであろうか。そうであるらしいことは次にのべるが，わたくしはヘーゲルの次のような言葉が真理を表現していると考えるのである。

「すべてはかかってつぎの点にある。すなわち，真なるものを，実体としてばかりでなく，まさに主体として把捉し表現すること，これである」[4]。「生きた実体は，存在といっても，真実には主体であるところの存在である。あるいは同じことであるが，その実体が自分自身を定立する運動であり，みずからは他者となりつつそのことを自分自身に関係づけ媒介するという，このかぎりにおいてのみ真に現実的であるところの存在である」[5]。

「絶対者を主体として表象しようとする要求から,『神は永遠である』とか,『神は世界の道徳的秩序である』とか，神は愛であるといったような命題が用いられてきた。こうした命題においては，真なるものが，まさしく主体として主語の位置におかれてはいるが，ただそれだけであって，自分自身へ帰ってくる反省の運動として表現されていない。このたぐいの命題は「神」という言葉ではじめられるが，この言葉は，それだけとしては意味のない音であり，たんなる名前にすぎない。述語において，はじめて，神が何であるかが語られ，内容と意味とが与えられる。……右（上述の）ような命題においては，主語としての主体は，固定した点のように考えられ，それが支えになってさまざまの述語がくっつけられる。そして，述語がくっつけられる運動は，それについて知る者の側に属することであって，同時に当の点としての主語そのものに属するとは考えられていない。実は，この運動が当のものに属することによってのみ，内容が主体としてあらわされることになるのである」[6]。

「概念把握的思考においては事情が異なる。ここでは概念が対象それ自身の自己であり，この自己は対象の生成としてあらわれる。したがって自己は，動かずにさまざまの偶有性をになっている静止的な主語ではなく，みず

から運動していって自分の諸規定を自分に取りもどす概念なのである。――この運動において，あの静止的主語そのものは崩れてゆく。それは区別と内容のなかに入ってゆき，むしろ自分が，規定，すなわち区別された内容となってしまう。同時にそれは，内容の運動に対立したままでいるのではなく，むしろ自分がその運動をしてゆく。こうして，あの形式的思考が静止的主語としてもっていた固定的な地盤はゆらぎ，この運動そのものだけが対象とされることになる[7]」。

表象的な「思考の進行は，命題において述語の形をとっているものが実は実体そのものであるということになれば，そこで阻止される。そこに突きあたって衝撃をうけると言ってもよい。この思考としては，主語がいつも根底をなしているものなのだと考えて，そこから出発するのであるが，いまや述語のほうがかえって実体であるということになれば，主語が述語になってしまい，したがって主語がなくなってしまったわけである[8]」。「哲学上の著作の難解さについての苦情は，大部分，このような仕方で思考の進行が阻止されることに人々が慣れていない，ということにもとづく[9]」。

ヘーゲルからの長い引用で紙面をついやしたが，この方があとの叙述を簡単にすると考えたからである。筆宝氏は次のようにのべる。「人間の労働力と労働量とが本来的には不可測で『経済学上の不確定性原理』がそこにある[10]，と。労働力と労働に量的規定性が存しないというのであろうか。「労働量」という表現があるところをみると，そうではなく，対象の内的生命は不可知であり，人間は外面的に自らの尺度をあてうるにすぎないということになろうか。とすれば，ここでは筆宝氏はヘーゲル的であるよりはカント的である。

同様の問題性を含む筆宝氏の文章をあげよう。こんどは労働力商品についてである。「多面的に外的に規定して『生け捕り』にしないかぎり一筋縄ではいかない，人間的な労働力なる『商品』のばあいは，労働力を，価値的に量的に還元した社会的に必要とされるレートで換算するのに家族生活費を最低基準にとる以外にやりようがないから，せめて資本は物的商品の原価計算方式を労働力にまでおしつけただけのことで，その価値は『生活手段の価値』

に相当するものとみなされ，媒介的に換算されて現実には処理されるのだ」[11]。これはまさに不可知な静止的主語を外的に規定するやり方ではないだろうか。内的必然性はないが，外的に強制的に現実処理がなされるということになっている。必要生産物なり労働者の消費元本なりの概念は，実在的なものではないというのであろうか。筆宝氏の論は，商品に内在的な商品価値は存在せず，したがって諸商品は内在的には比較しうるものではないが，貨幣によって比較されうるものとされる，といった説と共通する。ヘーゲルによれば，「生け捕り」ではこまるのだ。「死の中で自分を維持する生」を求めなくてはならないのだ。

筆宝氏はわたくしの弁証法を批判される。たとえば，荒又は「量的変化と無関係な必然性を『必然性が深まる』とか，『量は質に変じ，反対物への転化』としたり」[12]するのはよくない，とのべる。だが，必然性とは高度の範疇であって自らのうちに質や量を揚棄しているのではないだろうか。量的変化と無関係ではない。量の質への転化とは，量的変化から質的変化に移行することの通俗的表現であり，反対物への転化とは，質が変化して当初のものの対立物にかわることをいうのであって，わたくしとしては批判された心地がしない。

筆宝氏はわたくしが「矛盾」概念を「とくに不正確に乱用」している[13]，と指摘している。この点についてはわたくしもいま少し時間をかけて考えなくては即答できないが，批判者である筆宝氏の「矛盾」概念はいかなるものであろうか。次の文章が最も真意に近いとみられる。すなわち，「要するに，単なる両者の『差異』でも『対立』でもなく，＜同一分野＝地盤で運動過程にある両者の同時に両立しえない対立＞こそが矛盾＝『自己矛盾』なのである」[14]，と。同一分野とはあるが，この「分野」と対立している両者との内在的関係が示されない以上，矛盾の同一性はのべられていないとせねばならない。これでは，同一選挙区であらそう議員候補同士の関係のようではないか。筆宝氏の「矛盾」概念の積極的な適用は次の文章にみられる。「一社会経済構成体内部において，生産力は，産業部門間不均衡が均衡化される限り生産関係と

照応しうるし，両者は常に矛盾するわけでなく……」[15]，と。部門間均衡のみ注目し，労働力の保全がどうなっているかを考慮の外においている点でわたくしには看過しえないものがあるが，それはさておいて今わたくしが問題としたいのは，「照応」していれば「矛盾」していない，という把握である。部分的，一時的形態をとった矛盾を次々に解決しているかぎりでは「照応」といえても，つぎつぎにまたあらたな形態での矛盾を生み出すところの，過程の全体を貫らぬく矛盾をみなくてはならぬのであり，これこそが「あらゆる運動と生命性の根本」ともいうべき矛盾なのであって，この矛盾は，一時的な「照応」の底にもつらぬくのである。筆宝氏の「矛盾」概念は説得的ではない。

また，筆宝氏は，「荒又氏は『である』『ありえない』『する』と単純粗雑に云い切る[16]」，「荒又氏の『誤解』は，連辞たる＜ist＞についてあまりに素朴な点からくる[17]」，「『である』のか，『かのように』なのか，『とみなされる』なのか，『類比される』なのか，云々という論理学的吟味[18]」をもつとなすべきである，と批判している。たしかに，「ある」「ない」は論理学上で最も単純な規定であろう。しかし，そこにはすでに運動がある。「人間は動物である」，といっても，この命題の主語で指示されたものの内容が，述語に尽されているわけではない。だから，「すべての動物が人間ではない」という命題がすぐに生れる。と，次の一歩が求められなくてはならなくなる。今問題とされているのは美ではなくて真理なのだから，「ある」「ない」を要素とする展開の中にこそ求められるべきなのである。「かのように」と一言でいわれても，「ある」の不充分さを予感していることを周知させるための表現なのか，運動の形態を特徴づけるためにもちいられた表現なのか，何か芸術的な形象のための，直接の論理を超えた表現なのか，あるいはもっと他のことか，いっこうに判然としないのである。検討さるべきは，わたくしの「ある」「ない」が展開できているかどうかである。

筆宝氏は次のようにものべている。「『労働力の発展と破壊』の，『剰余価値対労賃』の対抗運動の奥にある両階級の『剰余価値優先判断対人間価値優先判断』をめぐるせめぎあい[19]」，と。こまかな表現は別として，わたくしからみ

れば,「判断」対「判断」の奥にあるのが，剰余価値対労賃の，労働力の発展と破壊の対抗なのであって，筆宝氏の論理は逆立ちしている。これと同種の問題が次の点にもみられる。筆宝氏は，氏が今後予定している研究の「最終章は『人類は資本主義時代の賃労働を通して何を学んだか』の総括をもって結ばれるであろう」[20]，としながら，実は拙著『賃労働の理論』が全巻をもってまさにそのことをら明かにしようとし，最終章に総括としての一章をおいたのだが，「『賃労働の世界史的意義』については氏（荒又のこと）の歴史観が不鮮明なためかほとんど記述されていない」，とのべるのである。わたくしとしては不本意なこの判定は，次のような筆宝氏の方法的姿勢にも関連しているであろう。すなわち，筆宝氏は，荒又は「価値判断主体を捨象して」議論をするのでよくない,「これを問題にするのは観念論だという唯物主義者は別だが，とのべている[21]。筆宝氏は,「価値判断主体」を重視するのは「唯物主義」ではない，とのべているのみだから，真意は充分に明らかではないが，少くとも，荒又が唯物論として徹底していない，とは批判していない。ところでわたくしは，やはり，存在が意識を決定する，との命題を正しいものと支持しているのである。

1）筆宝論文，前掲書，353頁。
2）拙著『賃労働の理論』,11頁。
3）筆宝論文，前掲書，353—354頁。
4）ヘーゲル『精神現象学』,前掲訳書，101頁。
5）同前，101頁。
6）同前，104—105頁。
7）同前，137頁。
8）同前，138頁。
9）同前，140頁。
10）筆宝論文，前掲書，375頁。
11）同前，358頁。同様の表現は375頁にもある。
12）同前，364頁。
13）同前，364頁。
14）同前，364—365頁。

15) 同前，366頁。
16) 同前，362頁。
17) 同前，357頁。
18) 同前，353頁。
19) 同前，376頁。
20) 同前，377頁。
21) 同前，359頁。

Ⅲ　筆宝氏の商品価値論

筆宝氏は,「荒又価値論」の「根本問題」として「『価値』を『物』とみなす価値『存在』の誤解」がある[1]，としている。そして,「価値は『物』(物理的運動量的な）のごとく実在するとみるのがまさしく商品の物神崇拝である[2]」,とも批判される。筆宝氏は，ここでも例のごとく，拙著『価値法則と賃労働』の中にわたくしの商品価値論，および商品の物神崇拝性論があるのに，これには触れずに「批判」されているのであるから，わたくしはここで，むしろ筆宝氏の商品価値論を吟味し，これを批判することで反批判をなそう。

筆宝氏はいう,「価値は『物』ではない。『労働時間の凝固物』でもない。……厳密にいえば，労働生産物は『価値として意義をもつ』（gelten als Wert）のである。……価値生産物は客観的存在であるとはいえ，価値は，ブルジョア社会的現実的に社会的通用力をもつに至った（その限りで『商品経済社会に必然的なる形態』となった）集団的主観判断の所産であり，……人と人との社会関係が物との価値関係として現われてくる商品生産社会の『物神崇拝』も社会活動ととり違えられた物の運動への集団的思いこみがブルジョア社会の慣習として定着していることに根拠をもつことをマルクスは示したのである[3]」,と。

筆宝氏は「集団的主観判断の所産」として「価値」を規定するが，そうした「主観判断」のよって立つ根拠も，また必然性ものべない。意識が存在を規定する。しかし，それはマルクスの真意から遠くはなれた理解である。商品価値は抽象的人間労働の凝固物である。抽象的人間労働はこの場合，もち

ろん物理的な時間ではない。最初から社会的なものが分析対象とされているのであり，社会的な諸規定の一つとして抽象的人間労働もまたあるのである。それは，労働が社会的総労働の一環であることを示しているものなのであるから。そのいみで抽象的人間労働は実在的である[4]。筆宝氏は，あるいは即座に，社会の先に人間がある，人間の判断から社会が生れる，と発言されるかも知れない。しかし，筆宝氏における人間はヘーゲルのいわゆる静止的主語であり，しばしば空虚である。

「凝固物」ではない，とすることは，マルクスが「生きた労働」と「死んだ労働」とを，労働そのものと対象化された労働とを区別していたことの意義を否定するものである。価値存在，価値対象性の概念は否定されてゆくことになる。すると，貨幣も，なぜそれが金という商品体でなければならぬかも，あきらかにならなくなる。おそらく名目主義的貨幣説，貨幣ヴェイル説につながってゆくことであろう。

なぜ，価値生産物は客観的存在であるが価値はちがう，とされるのであろうか。価値が客観的存在でなければ，当然，生産物価値もまた客観的存在ではありえず，そのうちから旧価値の移転部分を除いた価値生産物も客観的存在ではありえないではないか。筆宝氏はあるいは，「労働生産物は『価値として意義をもつ』」という意味のことをいいかえたにすぎず，その場合の価値生産物は，労働生産物のうちの新価値をあらわす部分のことである，といわれるかも知れない。では，「労働生産物は『価値として意義をもつ』」とはどういうことか。価値として意義をもつ，とは，価値ではない，ということか。もちろんそうではない。「ある」でもないし「ない」でもない。ということはしかし，そのいずれでもないということではないのであって，「あるでないわけでもない」のである。説明しよう。

筆宝氏は，「価値として意義をもつ」との表現とならべて，マルクスから次の二つの文章を引用している。「労働生産物は，互いに共通なこの社会的実体の結晶として，価値――商品価値である」。「価値としては，すべての商品は，ただ凝結せる労働時間の一定量であるにすぎない」。筆宝氏はこれらの文章

を，荒又の「ある」は粗雑であって，同じ「ある」とあっても，内容はいろいろなのだ，との趣旨で引用しているのであるが，わたくしの「ある」「ない」の弁証法で解説すれば次のようになる。具体的なものは，多くの諸規定の複合体としてあり，また他のもろもろのものとの関連においてある。商品生産社会の中で生産されている労働生産物は，そのような具体的なものとして実存している。これを分析してもろもろの規定を導き出すことは，対象の中にわけ入ってそこに実在するものを発見することである。そのいみで，諸規定はそこにあるのであり，労働生産物はそうした諸規定のそれぞれであるのである。とはいえ，分析して発見された一つや二つの規定のみで，商品生産社会の中にある労働生産物の内容がつくされるのではない。「ある」とはいっても，「それだけではない」のである。だから，「労働生産物」あるいは「商品」が，筆宝氏の引用の文章の中で，「……としては」とある側面について分析的に特定された上で，「……である」とのべられているのである。現実社会も，その中から特定の場面を切りとって静止させ，そこへ特定の方向からライトをあてれば，具体的なものの豊富な諸規定の中のいずれかが浮びあがってくるのであって，一度に全体をみているわけではないことをとりわけ強調しつつ，そこに浮び上がったものを表現すれば，「……は……として意義をもつ」となるのである。「ある」「ない」と別のことがいわれているのではないし，さらにいくつかに内容を分類しなくてはならぬようなニュアンスに富んだ文学的表現がなされているわけでもない。

筆宝氏は，「集団的主観的思いこみ」としての「物神崇拝」があるから「商品価値」が生れるかのようにのべている。上述の引用部分と別な個所でも，「狭義の経済学では，物に表示されている社会通念或いは物ないし商品とブルジョア社会の意識（みなして通用させる）との関係を追求するのである」[5]，とのべている。わたくしからみると，筆宝氏は，商品経済において「人間の諸労働の同等性は，労働諸生産物の同等な価値対象性という物象的形態を受けとり，人間的労働力支出の，その時間的継続による度量は，労働諸生産物の価値の大いさという形態を受けとり，最後に，生産者たちの諸労働のかの社会

的諸規定がそこで実証される彼らの諸関係は，労働諸生産物の社会的関係という形態を受けとる[6]」，ということと，「人々そのものの一定の社会的関係……がここでは人々の眼には物と物との関係という幻影的形態をとる[7]」ということとが区別されていない。前者は人間の意識から独立した関係であり，後者はこれが人間の頭脳へうつし出す影である。

「なるほど経済学は，不完全にではあるが，価値および価値の大いさを分析し，そしてこれらの形式のうちに隠されている内容を発見した。だが経済学は，何故にこの内容がかの形式をとるのか，かくして何故に労働が価値において，またその時間的継続による労働の度量が労働生産物の価値の大いさにおいて，みずからを表示するか？，という問題を，かつて提起したこともないのである[8]」，とマルクスがのべたとき，これは研究対象としての，人間の意識から独立した関係の方を指示していたのであり，「経済学者たちの一部のものが，商品世界に纏いついている物神崇拝・または社会的労働諸規定の対象的仮象・によって如何に甚だしく欺かれるかということは，なかんずく，交換価値の形成における自然の役割にかんする退屈にも馬鹿々々しい論争をみればわかる[9]」，とマルクスがのべたとき，これは後者，すなわち商品世界のみかけから人々の頭脳につくり出される幻想の方を指示していたのである。

狭義の経済学は，わたくしの考えでは，労働の社会的性格が商品の価値対象性という形態をとっているような生産関係を研究対象としているものである。この場合，現象とか形態とかいうものと仮象とはことなる。仮象とは，みかけだけのものであり，虚像である。現象や形態はこれとちがう実在的なものである。物神崇拝性は，商品生産社会における実在的関係が出発点になって，人々の頭脳にたえず再生産されるところの幻想，存在によって規定された意識であって，たとえ筆宝氏のいうように「恐慌，戦争，インフレ」によって「集団的主観的思いこみ」がゆらいだとしても，実在的な社会関係の中で生産の社会的性格が発展し，かつ，賃労働者の活動の中から，活動によって充たされた団結が発展していなければ，商品経済はゆるがないであろう。

「**附記**」ここで筆宝氏の指示により目を通した梯明秀氏の論文「冒頭文節の体系的意味」について，わたくしの意見をのべよう。

梯氏は河上肇氏による『資本論』冒頭文章の解説を検討の材料とし，これを批判しつつ自説をのべるのであるが，その骨子は次のごとくである。河上氏は「全体の富が一個のおそろしく厖大な諸商品の集大成として現われているのみではなく，同時に個々の商品は，かかる富の構成要素として現われている」ことは，「誰もが彼自身の経験によって直接に確かめうる現象」である[10]，として，つまりは直接的知識であるとしている。しかし，実はこの直接性は，「マルクスを媒介にした直接性である」[11]。また，「学問的端緒は，範疇としての商品であるはず」であり，「経験的感覚という直接性にあらざる，思惟を媒介にして到達しうる……内的なものでなければならぬ」[12]。河上氏の解釈は，『経済学批判』における当該部分が「一見したところ」という意味の句からはじまっていることにも由来していようが，しかしながらそれは「『一寸みると……として現われる。しかしながら（事実は……）』という慣用語」なのである[13]。「『諸商品の厖大な集成としての全体的な富』は，或る意味では誰にでも直接的に直観されうるにしても，この全体的な富のエレメントが商品であるという規定は，直接に眼で見られうる事柄ではない[14]」。冒頭文節はかようにして，「資本制的生産様式が支配的に行われる諸社会の富は，一つの厖大な諸商品の集成として直観される」，「個々の商品は，かかる富の要素形態として思惟される」，と書き改めうるものである[15]。

梯氏のこの考え方はまちがっているとわたくしは思う。たしかに，冒頭文節はすでに媒介されている。それは，問題を立てうるということがすでに解答を潜在させている，という意味においてである。そして，この問題自身がマルクス以前からの系譜をもっている。イギリス古典派経済学において，「諸国民の富」がさしあたり諸国民が年々消費する「あらゆる必需品，便益品」であること，個々の必需品や便益品は使用上の価値と交換上の価値をもつこと，これは常識であった。マルクスはそうした学史を背景にしな

がらも，資本制的生産様式を超歴史的なものとしてではなく，将来における崩壊をもみこした歴史的なものとして分析すべく，必需品や便益品ではなく，歴史的性格をもつ商品を最初から設定するとともに，富は商品としてあらわれる，として，資本制生産の行なわれる社会以外では富はまた別な形態をとりうることを最初から念頭におくよう読者に指示しているのである。こうした問題の設定はまさにマルクス自身のものであり，『経済学批判』にはじまるのである。かように，まさに媒介されているとはいえ，資本主義以前的社会についても何がしかの記憶をのこしつつ，眼前に大量の商品をみつつ，かつ古典派経済学の伝統の影響下にある人々には，マルクスにより与えられた導入の文節は理解しうるものである。

梯氏は，富が厖大な商品の集大成だ，ということは直観されうるが，個々の商品がその要素だということは思惟しなくてはわからない，といっているが，おもうに要素という語をいろいろにせんさくした『資本論』解釈史の影響もあってのことであろう。わたくしは，厖大な諸商品の集成をみとめれば，個々の商品がその要素をなすことは当然であって，リンゴの山をみとめれば，個々のリンゴがその山をつくり上げている要素だということも同時にみとめているようなものだと考える。それ以上のことを言おうとするのであれば，マルクスは当然もっと言葉を重ねたであろう。アダム・スミスとて，あらゆる必需品と便益品の総体を念頭においたとき，当然，その要素としての個々の貨物を考えたであろうし，そうしたものとしてこれを分析していたのであろう。われわれは，スミスを実際そのように読んでいるのではなかろうか。一方が直観できるのに一方は思惟しなくてはならぬなどということはない。

梯氏は簡単に「あらわれる」という語を「直観される」とか「思惟される」とかとおきかえているが，これは問題である。「あらわれる」は，マルクスにおいては，「現象」すなわち「本質と現象」のそれと結びついたことばであり，「現象する」とも訳されているものである。簡単に他の語とおきかえられない。また梯氏は，『経済学批判』の当該文節を，「一寸みると……

として現われる。しかしながら（事実は……）」といった文脈で読もうとされているが，これも問題である。事実は……と次にうち消すときには，マルクスは，仮象（Schein）の動詞である「みえる」(scheinen) を用いるのが普通である。ここでの梯訳「しかしながら」の，『批判』における原文は aber であって，そこまで重く訳さずともよい。文脈からみれば，個々の商品は要素としてあらわれる，ところでさらに商品は使用価値と交換価値との二重の観点から考察される……というものにすぎないのである。

1) 筆宝論文，前掲書，356頁。
2) 同前，357頁。
3) 同前，356—357頁。
4) 拙稿「抽象的人間労働と社会的労働」，『北大経済学研究』第22巻第3号を参照されたし。
5) 筆宝論文，前掲書，359頁。
6) マルクス『資本論』,青木文庫版第1分冊，172頁。
7) 同前，173頁。
8) 同前，183頁。
9) 同前，187頁。
10) 梯明秀『ヘーゲル哲学と資本論』,72頁。
11) 同前，74頁。
12) 同前，78—79頁。
13) 同前，92頁。
14) 同前，89頁。
15) 同前，93頁。

Ⅳ　筆宝氏の賃労働論

いよいよ中心論点に到着した。まず筆宝氏によればわたくしにとって「決定的となる誤訳と誤謬[1)]」のなされたマルクスの文章から検討をはじめよう。マルクスの表現は次のごとくである。

,,Unter Arbeitskraft oder Arbeitsvermögen verstehen wir den Inbegriff

der physischen und geistigen Fähigkeiten, die in der Leiblichkeit, der lebendigen Persönlichkeit eines Menschen existieren und die er in Bewegung setzt, so oft er Gebrauchswerte irgendeiner Art produziert.“（ディーツ1953年版175頁）。

わたくしが引用した長谷部訳は次のごとくである。「吾々が労働力または労働能力というのは，人間の身体すなわち生きた人的存在のうちに実存していて彼が何らかの種類の使用価値を生産するたびに運用する，肉体的および精神的な諸能力の総計のことである[2]」。

筆宝氏は上述の文章にわたくしがいまそのままかきうつしたように傍線を付し，「総計」ではなくて「総括」であり，「人的存在」ではなくて「人格」であり，「すなわち」ではなくて「，」である，とするのである[3]。卒然と読むと，何を筆宝氏がいいたいのかはわからない。この場合，「総計」と「総括」とはどうちがうのか，さしてちがわぬではないか，「すなわち」とは，コンマでつながれた語が同格であることを，内容的には言いかえであることを強調しただけではないか，Persönlichkeit は「人たる資格」といった意味であり，二つの訳にどれだけの実質的ちがいがあるのか。ところが，ここに実は隅谷理論の後継者たらんとしている筆宝氏の深いよみこみがあるのである。

筆宝氏はわたくしを批判して，「この三つの誤訳に疑問をはさまず人間 Menschen の肉体と人格とを区別できず[4]」にいる，としている。また別の個所では，わたくしの文章に評註しつつ，労働力は人的存在「の身体と人格に内在する人間諸能力のうち」もっとも基本的な「能力」であると，のべている[5]。さらに，つぎのような表現もある。「資本の支配から自己解放を求める労働者，この肉体的存在であると同時に，フランス革命的『自由』人格でもある『人間』[6]」，と。「と」あるいは「同時に」でつなげられている筆宝氏の表現から読みとれることは，筆宝氏が例のコンマを，換言すればの意ではなく，異質のものの並列として，und として理解しているということである。それが文法的に可能かどうかわたくしには疑問であるが，そのようによもうとする筆宝氏の意図からすれば，異質のものの総計とはいえないから総括とな

り，また一方は身体ではなく肉体に，他方は単に人たる資格ではなくまさに近代的な権利能力のごときものに読みわけられなくてはならぬことになるのである。

別にマルクスと同じことを言わねばならぬ必要は筆宝氏にとってもないわけだが，ともかくその解釈は少くともマルクスの真意にそうものではないであろう。以下に説明しよう。

労働力は肉体的および精神的能力である。Leiblichkeit を肉体と訳してしまうと，精神的能力は人格に属することになるのか？精神は頭脳のはたらきなのだから，こちらの能力もまた Leiblichkeit に属させなくてはならない。また，マルクスがわざわざ der lebendigen Persönlichkeit とかいているのは，近代的な権利能力といった抽象的なものではなく，もっと具体的なものを意味させるためではないか。さらに，もし筆宝氏のいうようにマルクスが，肉体および人格という異質な二つのものの中に労働力という一つのものが実存しているといっていたのならば，筆宝氏とともにマルクスも，異質の二つのもののどのような関係のなかに労働力という一つのものがあるのか，さらに言葉をくわえて説明する責任を負ったであろう。マルクスは通常そんなあいまいなままにおかれた表現はしない。

マルクスは別の個所では，Menschen と Arbeitskrafts との関係をのべるとき，とくに Leiblichkeit と Persönlichkeit との区別を考慮していない。それは次のごとくである。,,Der Mensch selbst, als bloßes Dasein von Arbeitskraft betrachtet, ist ein Naturgegenstand, ein Ding, wenn auch lebendiges, selbstbewußtes Ding, und die Arbeit selbst ist dingliche Aeußerung jener Kraft“（デーツ1953年版211頁）。

筆宝氏は，しかしながら，荒又のように「何ごとも労働力に引きつける擬人的『労働力』観」にあっては，「労働力商品化の完成と表裏して近代市民社会に初めて確立する労働者の人権，『フランス革命の辺境における総括者』たるヘーゲルの『精神現象学』，『歴史哲学』，『法の哲学』からマルクスが学び，さきに明記した所有と認識判断行動の主体たる『自由』な『人格』の意識はほとんど消え入らんばかりである」[7]，と批判している。それゆえ，次に，労

働力商品概念をめぐるヘーゲルとマルクスの関係についてわたくしの考えをのべよう。

マルクスは，労働力概念の確立によって，古典派経済学における労働売買説，労働の価値説を克服するのであるが，そのさいヘーゲルを註記していることは周知のところである。念のために引用するならば，ヘーゲルは次のごとくいっている。「私の特殊な，身体的及び精神的技能及び活動能力について，私はその個別的な生産物，及び時間を限っての使用を他人に譲渡することができる。けだしそれらは，かかる制限に従えば，私の総体性及び普遍性に対し外面的な関係を含むものだからである。労働によって具体化された私の全時間及び私の生産の総体を譲渡することとなると，私はそれらの実体的なもの，私の普遍的活動及び現実性，すなわち私の人格を他人の所有たらしめることになるであろう」[8]。マルクスはこの見解をうけつぎながら，労働力の所有者が労働力を自分自身の商品として取扱いうるのは，彼がいつでもそれを一定の時間ぎめで売り，自分の労働力を他人に自由にさせるにしても，常にただ一時的にのみ，一定の期限つきでのみさせるからであって，そうであってはじめて，労働力を譲渡することによっては労働力に対する自分の所有権を放棄しない，との関係がなりたつのである，とのべたのであった[9]。たしかに，そのいみでは，「マルクスはフランス革命の辺境における総括者」たるヘーゲルを受けついでいるといってよいのであろう。

とはいえ，次の点が注目さるべきである。この場合ヘーゲルは，「時間を限っての使用」と「全時間」とを対比しているのであり，一段下げて組まれた解説部分には，これを「物の実体とその利用との関係と同一」であるとして，次のようにのべているのである。すなわち，「利用が制限される限りにおいてのみ，利用と物の実体とは区別されるが，それと同様，私の力の使用は量的に制限される限りにおいてのみ力そのものから，したがって私から区別される」[10]，と。私の力のあらわれの総体は，その力そのものであり，つまり私自身である，というのである。マルクスの次の文章，「労働力の所有者がそれを商品として売るためには，彼は，それを自由に処分することができなけれ

ばならぬ，つまり，自分の労働能力・自分の人格・の自由な所有者でなければならぬ」[11]，においても，労働力の全体と区別されたところの，労働力の全体を引去ったのちになおのこるものであるところの人格などは考えられていないとしなくてはならない。労働力およびその発現の全体と区別された労働者を考えるのは，ヘーゲルをも「克服」して，それ以前的な静止的主語の立場にもどることである。

さらに次の点も注目さるべきである。ヘーゲルは先に引用した文章の中で，活動の成果としての「個別的な生産物」の譲渡と，労働力の「時間を限っての使用」すなわち活動そのものとを，全く同じものととりあつかっている。たとえ「個別的な」という規定と「時間を限っての」という規定とが全体ではない，との意味では同質であるとしても，活動そのものと活動の成果とを区別していないところに，まさにヘーゲルの「近代」があるのであり換言すれば，ヘーゲルが「現代」になりえなかったゆえんがあるのである。たとえ自由で法律上同じ身分の人格として契約したもの同士であっても，自分の労働力を使用させるものと他人の労働力を使用するものとの関係，自分の労働力を他人に引渡すものと他人の労働力を自分のものとするものとの関係は，実は支配と従属の関係なのであった。これをあきらかにしたのがマルクスの「現代」性である。マルクスにそれを可能にしたものとして，私の力の外へのあらわれの総体は私自身であるというヘーゲル的把握があった。

筆宝氏とわたくしとの喰いちがいは，かようにして，わたくしによる長谷部「誤訳」の見過ごしから生じたものではなく，筆宝氏の「独自」のマルクス解釈から生じたものである。筆宝氏はなにゆえに無理をして人間の肉体と人格の区別をマルクスによる労働力概念の規定の文章の中に読みこもうとするのであろうか。ここにこそ，筆宝氏の隅谷理論の後継者たらんとする面目があるからなのである。

すでに大河内一男氏は，ブレンターノに学んで，「労働力の商品性の特質は，それが労働者の人格，彼自身の肉体と結合してのみ雇傭者に提供せられる」ところにある，とし，労働力とその現実的担当者たる人格的存在との間

の矛盾をみとめていた。しかし，人格的存在，人間的存在という概念は，労働力概念との対比において極めて重要な位置にあるにもかかわらず，明確に規定された内容をもっていなかった。[12] ブレンターノ＝大河内氏は，「近代」の内部矛盾があらわになった時代において，なお労働力商品と賃労働者の自由を両立させるべく苦慮し，重要なのは「人格的なるものが『労働力』として商品化したという点にあるのではなく，商品価値評価を与えられている生産要素たる『労働力』の現実的担当者がまさに生ける人間であり，人格的存在であるという点に存しているのである」[13]，として，ヘーゲル的な見方からはなれ，労働者の人格とは外面的には不幸にして結合しているが，本質的には区別されうるものとしての，「労働力」概念をうち出したのであった。量的に限られているから全体と区別されて外面的に分離されうるものではなく，外面的には結合しているが質的に区別されているものとなったのである。

隅谷三喜男氏はこれをさらに一歩押しすすめる。氏は，資本制社会においては「労働力として存在することによってのみ労働者＝人間としての存在を許される，という点にこそいっさいの労働問題の基底が存する」[14]，とのべる。すなわち，労働力が人格から分離できないので労働力商品化から労働問題が発生するのだ，とするのが大河内氏であったとすれば，隅谷氏は，労働力として社会に認められはじめて人間として存在しうるところが労働問題の根本である，とするのである。労働力である，ということは，隅谷氏において，人間性の中の卑少なる一部分とされてしまう。そして，そうしたものとしての労働力と，その他の人間性を概括したものと推定される労働者というものと，この二つのものの統一として，自身に矛盾を内包したものとしての隅谷「賃労働」概念が形成されるのである。とはいえ，隅谷氏において「労働者」とは何か，と問えば，何らの積極的なあるいは明示的な規定のないものであることがあきらかとなるのである。[15]

筆宝氏はこの隅谷理論を継承する。だからこそ，氏はわたくしに対して，「何ごとも労働力に引きつける擬人的『労働力』観」[16]であるとか，「初めに労働力ありき」[17]であるとか，「『家事能力』が経済的労働能力に収斂して」しまうのはお

かしい[18]，とか，社会主義社会では「働けざる者」はどうするのかとか[19]，随所で批判された上で，「荒又理論の最大の問題点は，その労働力中心主義，労働力還元主義，労働力偶像崇拝的性格である[20]」，としめくくることになるのである。だからこそ筆宝氏は，労働力の全体が人格となってしまうような人格ではなく，Leiblichkeit と同じものとしての人格でもなく，それらと違ったなにかにあるもの，「フランス革命的な自由な人格」，「個的類的自己実現＝自由を志向する労働者人間主体」，そうしたことばで筆宝氏が表現しようとしている何かあるものを，マルクスのいう der lebendigen Persönlichkeit に読みこもうとしているのである。以心伝心である範囲の人をうつかも知れぬ妖気を感じないわけではないが，筆宝氏の「労働者人間主体」は合理的な明晰な概念とはいえない。

かようにして，筆宝氏の「賃労働」論とわたくしの労働力概念および労働力商品概念は，出発点も，その後の方向もあまりにもかけはなれているのである。したがって，わたくしは拙著『賃労働の理論』で貧困と並べて労働苦の概念を重視し，とりわけ「労働組織」と題する節の展開はこの概念を軸とし，労働で奪われたものは労働力価値の実現度を高めることだけでは回復されえないことを強調したつもりであるのに，これは全くとり上げてもらえず，「かくてヘーゲル以降『経哲手稿』をへて『資本論』でも労働力商品化論剰余価値論・物象化論・窮乏化論などに展開されて，ルカーチからメサロシュ，マレにいたる近代社会に固有な『労働の自己疎外』論は放逐され[21]」ている，と断罪されるのである。

こうした中心論点からみると小さいが，その他若干の批判点に触れておこう。第1，筆宝氏は，わくしが生活手段商品は消費されるとともに商品価値を消失するとしているのはあやまりであって，市場で買手の手に入るとともに彼の生活のための使用価値となり，すでに商品価値ではなくなる，とのべている[22]。だが，ブルジョアはしばしば奢侈品を購入してこれを楽しみつつ，必要あれば随時これを換金して資本価値にくり入れているし，プロレタリアは時折なけなしの家財を売り払ったり質に入れたりしているではないか。第

2，筆宝氏は，わたくしが生産＝労働過程を「労働力商品の現実的引渡し過程」としているのはあやまりであり，工場の門まではそうだとしても，門の中に入ればすでに『生産資本』としての労働力」である，とのべている。[23] だが，労働者は耐えられず途中で逃げ出すこともあるではないか。工場の門に錠をかけたり，門外までも暴力的に追跡したりすることもままあるとはいえ，違約金を要求するとか，後払いの賃銀の支払いを拒否することぐらいでおさまることの方が資本主義として一般的ではないだろうか。第3，筆宝氏は，わたくしが労働力が労働の生産物ではないと一方で強調しながら，他方で労働力の再生産をいうのはおかしい，生産されるものでないものがどうして再生産されるのか，と批判している。[24] 労働力が労働生産物ではない，というのは，狭義の生活は労働の対象化過程ではない，むしろ対象化された労働が消失して労働力にもどる過程だ，という意味である。消費財の消費過程は通常そのいみでなら労働力の生産過程であるといってもよい。重要なのは，賃労働者の狭義の生活過程が単に労働力の再生産過程であることなのである。第4，筆宝氏は，わたくしが本来は市場の範疇である「商品」を「市場」でも「過程」でも乱用する，[25] とのべている。だが，「過程」でつかっていけなければ，どうして不変資本価値が新生産物に移転するのか。労働力「商品」概念を出発点にするのみならず，これを全巻につらぬくのが『賃労働の理論』におけるわたくしの方法意識である。

1）筆宝論文，前掲書，352頁。
2）マルクス『資本論』，青木文庫，第2分冊，315頁。
3）筆宝論文，前掲書，352頁。
4）同前，352頁。
5）同前，353頁。
6）同前，355頁。
7）同前，353頁。
8）ヘーゲル『法の哲学』第67節，高峯一愚訳，創元文庫版，127頁。
9）マルクス，前掲書，315—316頁。
10）ヘーゲル，前掲書，127頁。

11) マルクス，前掲書，315頁。
12) 拙著『価値法則と賃労働』,89—90頁。
13) 大河内一男『社会政策の基本問題』昭和19年増訂版，9頁。
14) 隅谷三喜男『労働経済論』,筑摩書房，49頁。
15) 拙著『価値法則と賃労働』,212頁。
16) 筆宝論文，352頁。
17) 同前，353頁。
18) 同前，355頁。
19) 同前，371頁。
20) 同前，374頁。
21) 同前，355—356頁。
22) 同前，358頁。
23) 同前，360—361頁。
24) 同前，362—363頁。
25) 同前，363頁。

むすび

筆宝氏によれば，賃労働論の課題は,「労働問題の真実とそこに内在する『賃労働』の精神[1]」,「自己目的化された剰余価値生産＝『蓄積のための蓄積』信仰たる『資本の精神』に対抗する『賃労働の精神』を内的につかむ[2]」ことである。

「精神」という語が,「本質」,「内的必然性」といった意味ならば，わたくしとさしてちがわない課題をたてているかにみえる。わたくしは,労働力と，それに附加された社会的歴史的形態規定たる商品性との統一物として，労働力商品を考え，賃労働の本質は労働力商品であり，賃労働の歴史的展開は労働力商品の矛盾の展開であることを示し，やがて労働力が商品性を脱却し，したがって賃労働が死滅する将来をも展望することを，賃労働論の課題としたのである。

ところが筆宝氏は,「資本は賃労働を前提とし，賃労働は資本を前提とする」,とのマルクスの命題を一応うけ入れつつも，しかし資本に対し相対的に自立した「賃労働」という隅谷式範疇体系を固持し,「荒又批判」のための

「基準軸」の一つを「『支配されつつ資本に対立して『自立』していこうとする』自己矛盾的存在としてある賃労働者の『隷属下の自立と自己解放の論理』の展開方向」[3]とおくのである。そのため，資本と賃労働との同一性はあいまいにならざるをえず，資本に対して自立したときに賃労働のままではありえぬこと，人類史にとって資本の克服は賃労働の克服でもあることがあいまいにならざるをえないのである。

筆宝氏によるわたくしの批判はほとんどあたっていない。筆宝氏によるマルクス解釈は正しくない。筆宝氏による隅谷「賃労働」概念新展開の試みもまた，未だ成功しているとはいえない。

1）筆宝論文，前掲書，350頁。
2）同前，343頁。
3）同前，343頁。